

宏智頌古百則の研究(二)

佐藤悦成編

緒言

本稿は、宏智頌古百則の研究(一)となる。(二)に続いて第三十一則より第五十則までを収載した。

本論考では、(一)と同様に先学の成果を参考にしつつ、独自の考察を進めている。従来は、坐禅体験に基づいた提唱の形態か、学問的考察による和訳の形態でまとめられてきた。本稿でも積意を置き、宏智正覚が

伝えようとした教えに迫ろうと試みている点も同様である。今回の(二)に参加してくれたのは、佐藤清道氏、伊藤秀真氏、大橋崇弘氏、西川慈恩氏、杉原修一氏を中心として、関美那子氏、有田大悟氏、富川拓哉氏の参加も得た。今後継続して第百則までの考察を目指す、参加諸氏の協力を得て、充実した成果となることを期待している。

佐藤悦成

第三十一則 雲門露柱

【本則】 擧。雲門垂語云。古佛與露柱相交。是第幾機。衆無語。自代云。南山起雲。北山下雨。

〔訓読〕 挙す。雲門垂語して云く。古仏露柱と相交われり。是れ第幾機ぞ。衆無語。自ら代つて云く。南山に雲起ころば。北山に雨下れり。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。雲門文偃が学人に教えていわれました。「仏としての衲が外をみるのは、第何番目の働きでしょうか」と。大衆は答えませんでした。そこで雲門が代わって「南山に雲

〔釈意〕

雲門は、自己の内にある分別を用いることなく、すべてをありのままに観ることができなければ、実相の会得には至らないと示した。露柱はその例として説いたのであり、仮有空無の意味を説いている。真実の仏法が何であるか、と問

が起これば、北山に雨が降る」といいました。

われた大衆は、あまりに初歩的な質問と捉えて逡巡したのか、問いかけに応じることができなかった。仕方なく雲門は自らの問いに自身で答えることになった。雲が発生すると雨が降るように、思慮分別が入ることなく、自身の心に隙間が生じなければ、眼前に仏法の真実が現れていることを識ることができる。

【頌】 頌曰。一道神光。初不覆藏。超見縁也。是而無是。出情量也。當而無當。巖華之粉兮蜂房成蜜。野草之滋兮。麝臍作香。隨類三尺

一丈六。明明觸處露堂堂。

【訓詁】 頌に曰く。一道の神光、初めより覆蔵せず。見縁を超越るや、是にして是無し。情量を出づるや、當って当ること無し。岩華の粉たるや蜂房蜜を成す。野草の滋たるや、麝臍香を作す。隨類三尺一丈六、明明として触処露堂堂。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。仏の教えは、初めから蔵すところがありません。見る側と見られる側を超えた時、本来は一体になるのです。情識や思量を超えて、正邪の分別を入れることがなければ真実は眼前にあります。それを喩えれば、岩の傍らに咲いている花に、蜂が受粉して蜜を作り、また、野草が茂り、草を食んだ麝は臍の香りを漂わせるようなものです。お釈迦様は、時に応じて三尺に、時には一丈六尺に身を変じてその姿を現されます。そのすべてに真実を顯してみえます。

【釈意】

この世界と悟りの世界は、別個の存在ではなく、隔てる境界が存在している訳ではない。人は凡聖、清濁の分別を加えて、自ら真実を見えなくしている。お釈迦様が、仏性そのものを分かりやすく喩えられたように、目の前にある真実を分別を入れずに会得すれば、二つの世界は同じであることが分かるようになる。

【語彙】 【雲門】 雲門文偃(864〜949)のこと。嘉興(浙江省)の人。俗姓は張氏。雪峯義存の法嗣。毘陵(江蘇省)の戒壇で具足戒を受ける。諸方を遊歴して、雲門

山に禪宇(大覚寺)を建立。三〇余年住した。【露柱】 法堂や仏殿をささえる円柱のこと。無情または非情なもの意。【南山起雲北山下雨】 唐の宋璟「羯鼓歌」の引用。大自然のそれぞれの営みにより、お互いのはたらきが、お互いを生かしあっている(『碧巖録』83則にもみられる)。「雲門広録」巻下には、「南山打鼓北山舞」の語がみられる。【見縁】 見と見縁(分別と分別の原因。能所のこと)。「情量」情識をもって思量すること。「麝臍作香」麝は鹿に似た動物。臍の中に香を貯えている。【隨類三尺一丈六】『涅槃經』二〇の引用。俱尸長者の三尺の矮身と釈尊の丈六の全身を並称し、凡聖の意味。

第三十二則 仰山心境

【本則】 擧。仰山問僧。甚處人。僧云。幽州人。山云。汝還思彼中麼。僧云常思。山云。能思是心。所思是境。彼中山河大地樓臺殿閣人畜等物。反思思底心。還有許多般麼。僧云。某甲到這裏。總不見有。山云。信位即是。人位未是。僧云。和尚莫別有指示否。山云別有。別無即不中。據汝見處。只得一玄。得坐披衣。向後自看。

【訓読】 挙す。仰山僧に問う。甚の処の人ぞ。僧云く。幽州の人。山云く。汝還た彼の中を思うや。僧云く。常に思う。山云く。能思は是心。所思は是境。彼中には山河大地樓台殿閣人畜等の物あり。思底の心を反思せよ。還つて許多般有りや。僧云く。某甲這裏に到つて総に有ることを見ず。山云く。信位は即ち是。人位は未だ是ならず。僧云く。和尚別に指示有ること莫しや否や。山云く。別に有り別に無しといわば即ち中らず。汝が見処に抛らば。只一玄を得たり。得坐披衣。向後自ら看よ。

【和訳】

諸君、よく聴きなさい。仰山慧寂が僧に問いました。どこの生まれですか。僧が答えました。「河南省幽州の者です」。仰山が言いました。「君は故郷を思い出しますか」。僧が言いました。「いつも思い出します」。仰山は言いました。「思い出す主観は心であり、思い出す客観は外境である。故郷には山も河も大地も大きな建物も人も家畜等のものもある。それらを思い出す主観の心を繰り返すすべてを見極めてみるならば、心の中に、あれやこれやのものがあるかね」。僧が言いました。「柄はそこを極めて、既に悟りの境地に至っています。すべてのものが実在しないことを会得しています」と。仰山は言いました。「客観という外移りかかわっていることは分かっているようだが、君自身の主観にも実態がないことがわかっていない」と。僧が言いました。

宏智鎮古百則の研究(二)(佐藤)

【釈意】

師家と修行僧が初相見のとき、僧の至った境地を探るために、師家が試みるためこのような問い方をした。仰山が、自分が仏の世界にいてることを分っているかと問うのにたいして、僧はそのことを理解して、「いつも思っています」と答えた。仰山が、自身の心が外の世界を認識するという分別がありますか、といい、つづけて、この世界には山もあり川もあり、あらゆる物があるが、それが境である、という。この問いに、僧は、定まった心は元々なく動いていくもので、固定した概念は残っていないと答えた。そこで仰山は、修行僧の現在の境地は認めながらも、まだ完成しておらず、さらに一步を進めなければ自身身の悟りに至らない。真実が分かっただけではすべてを会得したわけではないと示した。

「和尚さま、更なるご指導はありませんか」。仰山が言いました。「更なる指示の有るか無いかというのは的はずれだ。君が会得したところは、一方の信位を得ただけだ。専一に修行して、その後自ら看とどけるべきである」と。

【頌】 頌曰。無外而容。無礙而冲。門牆岸岸關鎖重重。酒常酣而臥客。飯雖飽而頽農。突出虚空兮風搏妙翅。踏翻滄海兮雷送遊龍。

【訓読】 頌に曰く。外ること無くして容れ。礙ること無くして冲る。門牆岸岸 関鎖重重。酒常に酣にして客を臥せしめ。飯飽くと雖も農を頽らす。虚空に突出して 風妙翅を搏たしめ。蒼海を踏翻して 雷 遊龍を送る。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。心は広大にして無限にすべてを包容し、礙えらること無く常に動いて止みません。自分自身が分らないのに、自分自身の内に閉じこもってしまいます。半分までで満足してしまっているのです。それを喩えれば、酒はいつも美味で、人を酔わせているようなものであり、また、飯を腹一杯に食べていながら、自ら米を作らないようなものです。風が金翅鳥王を大空に飛び出すのを後押しして、翼に風を送るようなものであり、龍が蒼海を飛び出て天に昇る時、雲雷がそのはたらきを助けるように、仰山は僧の修行を助けたのです。

【語彙】 【仰山】 仰山慧寂（815〜891） 瀧仰宗。瀧山靈祐の法嗣。韶州（広東省

人位は未だ是ならず）【信位は真実、人位は現実と見ることができ】

【冲る】 高くあがる。高くとびあがる。【重重】 堅牢なるかたち。

【釈意】

悟りとはこういうものでなければならぬと、自分の分別に閉じこもっている。酒を飲んで客はいい気分になってしまった、もう腹一杯に飯を食ってしまったが、その後を自分で計ることがない。仏法の有り方を一寸理解していい気分になっている。自分が真実の世界にいるのに見えることが出来ていない。僧の見解に悟境への執着が残っていることを問題とするのである。

懷化県の人。俗姓は葉氏。【幽州】 河南省の北部、北京付近のこと。【信位は即ち是、

【得坐披衣】 坐を得、衣を披くの義。自分の修行のこと。【岸岸】 高く屹ゆるかたち。

第三十三則 三聖金鱗

【本則】 學。三聖問雪峯。透網金鱗。未審。以何爲食。峯云。待汝出網來向汝道。聖云。一千五百人善知識。話頭也不識。峯云。老僧住持事繁。

【訓読】 學す。三聖 雪峯に問う。網を透る金鱗。未審し。何を以てか食となすや。峰云く。汝 網を出で来らんを待つて汝に向かつて道わん。聖云く。一千五百人の善知識。話頭だも也た識らず。峰云く。老僧住持の事繁し。

【和訳】

諸君、よく聴きなさい。三聖慧然が雪峯義存に問いました。「漁夫の網をくぐり抜けた金鱗の魚は、さて、何を食べるのでしょうか」。雪峯が答えました。「君が悟りという網を抜け出たら、君に教えてあげましょう」。三聖は言いました。「一千五百人の弟子達を導く優れた指導者ともあろう方が、問答の仕方もご存じない」。雪峯が言いました。「柄は住持の仕事が忙しいのでな」と。

【釈意】

『碧巖録』第四十九則「三聖透網金鱗」も同じ内容。三聖は悟りにこだわっており、悟りの網を抜け出たといっているが、まだ悟りという網を被った状態にいる。雪峯は三聖の修行を評価しているが、悟りの網を抜け出さないといい、と論している。師から教えてもらったことでは悟ったことにならず、自分で悟道の先を会得しなければならぬ。雪峯は、本当に抜け出して来たら教えよう、という。すべてを教えることは三聖の悟達にならないのである。

【頌】 頌曰。浪級初昇雲雷相送。騰躍稜稜看大用。燒尾分明度禹門。華鱗未肯淹壘甕。老成人不驚衆。慣臨大敵初無恐。泛泛端如五兩輕。

堆堆何啻千鈞重。高名四海復誰同。介立八風吹不動。

【訓読】 頌に曰く。浪級初めて昇るとき 雲雷相い送る。騰躍稜稜として大用を見る。尾を焼いて分明に禹門を度る。華鱗未だ肯えて壘甕に淹されず。老成の人は衆を驚かさず。大敵に臨むに慣れて初めより恐るること無し。泛泛として端に五兩の軽きが如く。堆堆として何ぞ啻だ千鈞の重きのみならんや。高名四海 復た誰か同じき。介り立つて八風吹けども動ぜず。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。禹門の三級の滝を鯉が初めて昇る

【釈意】

頌は雪峯に対する讃嘆である。三聖は若いだけに柔軟さがなく、雪峯は老成の

とき、雲雷がさらにたすけ、勇ましく躍り上がって偉大なはたらきが現れます。雷火で尾を焼いて、確かに禹門を渡って龍となります。華麗な金鱗の鯉は、甕に閉じ込められることはありません。さすがに老成した指導者の雪峰は、修行者を驚かすことはいのです。大胆不敵な挑戦にも、いつものことのように受け止めて恐れることはありません。あたかも自由自在に翻る五両の軽き羽のようであり、千鈞の重みだけが尊いではありません。その高名は四海に行き渡り、一体、同じような人に誰がいるでしょうか。独りそそり立って、を動揺させる八風（利・衰・毀・誉・称・譏・苦・楽）が吹いても動揺することはないのです。

人である。三聖の元気な若さに比べれば、雪峰はさすがに老成した指導者で、少しも修行者を驚かすことない。旗が風に舞うようにどんな人がきても、自由自在に動くことができるのである。このような力量を持っているので、その高名は津々浦々にいき渡り、互角にわたり合える境界の人はどこにもいないのである。人の心を動揺させるものが吹いても動揺することはない、三聖の問いへのこの対応が雪峰の宗風である。自分の立場に執着しないのである。

【語彙】【三聖】三聖慧然（不詳）臨濟義玄の法嗣、鎮州三聖院に住した。仰山慧寂、香巖智閑、徳山宣鑑、雪峯義存等にも歴参した。俗姓、本貫等不明。【雪峰】雪峯義存（八二二〜九〇八）徳山宣鑑の法嗣。雪峯山の開山第一世として住すること三九年、門下に雲門、玄沙、保福、長慶ら多くの俊秀を打出した。真覚大師。【浪級初めて昇って雲雷相送る】兎門の三級を鯉が昇る時、雷が扶けるとい意。【三級】入り口、初めの一步のこと。【稜稜】威勢勇ましき形容。【尾を焼いて分明に兎門を度る】鯉が兎門三級の波を躍り超えて龍門に登り化して龍となる時、雷火がその尾を焼くということ。【華鱗未だ肯えて甕甕に淹されず】三聖が雪峯によって、なます桶に自分そこから出ないという意。【泛泛として端に五両の軽きが如く】泛泛とは、翻っている様子。五両はここでは重さが極めて軽いことの例え。【八風】利・衰・毀・誉・称・譏・苦・楽のことで、人の心を動揺させるもの。

第三十四則 風穴一塵

【本則】 擧。風穴垂語云。若立一塵家國興盛。不立一塵家國喪亡。雪竇拈拄杖云。還有同生同死底衲僧麼。

【訓読】 挙す。風穴垂語して云く。若し一塵を立つれば家國興盛し。一塵を立てざれば家國喪亡す。雪竇 拄杖を拈じて云く。還た同死同生底の衲僧ありや。

【和訳】

諸君よく聴きなさい。風穴延沼が問題を提示して言いました。僅

【釈意】

『天聖広燈録』巻十五の「風穴延沼章」の内容に同じ。野老とは、田舎の農夫

かなことで国家は興隆したり、滅亡したりします、と。そこで雪寶重頭は、拄杖を取り上げて言いました。さて、この中に衲と運命を共に修行する修行僧はいますか、と。

【頌】 頌曰。皤然渭水起垂綸。何似首陽清餓人。只在一塵分變態。高名勲業兩難泯。

【訓読】 頌に曰く。皤然として渭水に垂綸より起つは。首陽清餓の人に何似ぞ。只だ一塵に在って変態を分かたず。高名勲業両つながら泯じ難し。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。渭水に釣り糸を垂れていた太公望が文王に請われて天下を治めたことと、義を通して首陽山で餓死した伯夷・叔斉と比べてどうでしょうか。伯夷・叔斉の高名と太公望の勲功とは、両方とも必要なのです。

のことである。農夫にとって太平とは、治めるものと治められるものが意識しあうことない状況を理想とし、権力が強くなると農夫が眉をしかめるとい、権力者が弱くなると農村がゆつたりとおだやかになることをいう。心の中に僅かでも煩惱が起これば、悟道から遠くなり、煩惱が制御されれば悟達の道が開ける。雪寶は、その教えを会得しようとする修行僧はこの中にいるかと鼓舞している。

【釈意】

『史記』列伝からの引用である。呂尚が釣り糸をたれているところ、周の太公（文王の父）に起用され宰相の地位を与えられた、という話が元となり太公望という言葉が生まれた。伯夷・叔斉が周に仕えていた時、殷の紂王が暴君であつたため、周の武王が征伐にかけた。伯夷・叔斉は、紂王は周の主君に当ると主張したが、紂王は殺されて周が覇者となった。伯夷・叔斉は首陽山に隠棲し、遂に飢え死にしたというのである。心の中に欲望があれば、それぞれの有り方が変わっていき、世法は転変するが、仏法は時代によって変わるものではない。仏法と世法は理想と現実であり、互いが互いを必要とするのである。

【語彙】 【風穴】 風穴延沼（896〜973）劉氏、余杭の人、南院慧顛の法嗣。【雪寶】 雪寶重頭（980〜1052）雲門下三世智門光祚の法嗣。【皤然】 皤然として渭水に起こつて綸を垂る。皤然は白髪の形容。渭水は甘肅省から陝西省を経て洛水と合して黄河に入る河。【首陽清餓の人】 首陽は山西省水済県の南にある山。清餓の人は清廉潔白にして餓死した人。『史記』伯夷伝の周の粟を食わずに餓死した伯夷・叔斉兄弟のこと。【両つ】 仏教の完成、悟りは行ったら又帰ってくるという両方向があるとする。世法（大公望）・仏法で、この社会には二つあるとする。大公望（政治家・文王の宰相）が伯夷と叔斉を助ける。二人は義の人である。

第三十五則 洛浦伏膺

【本則】 挙。洛浦參夾山。不禮拜當面而立。山云。鷄棲鳳巢非同類出去。浦云。自遠趨風。乞師一接。山云。目前無闍黎。此間無老僧。

浦便喝。山云。住住且莫草草忽忽。雲月是同谿山各異。截斷天下人舌頭即不無。爭教無舌人解語。浦無語。山便打。浦從此伏膺。

【訓読】 挙す。洛浦 夾山に參ず。礼拝せずして面に當つて立つ。山云く。鷄鳳巢に棲む、其の同類に非ず出で去れ。浦云く。遠きより風に趨る。

乞ふ師一接。山云く。目前に闍梨無く此間に老僧無し。浦便ち喝す。山云く。住みね住みね且らく草草忽忽たること莫れ。雲月是れ同じく溪山各異なれり。天下の人の舌頭裁断することは即ち無きにあらず、争か無舌人をして解語せしめん。浦無語。山便ち打つ。浦此より伏膺す。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。洛浦元安が夾山善会に参じた時、夾山に礼拝もせずに面前に立ちました。夾山は言います。「鷄が鳳凰の巢に住んでいる。同種の者ではないのでここから出ていかねばなりません」。洛浦は言います。「遠くから高名を聞いてまいりました。一つ教えを頂戴できませんか」夾山は言います。「目の前には、あなたも居ないし、ここに柄もいません」。洛浦が「喝」といいました。夾山は言います。「やめなさい、やめなさい。そんなに、騒ぐことではありません。月や雲、谷や山は同じものですが、見る者によって見方が異なるものです。悟りを得る人がいないわけではありません。しかし、仏法を伝えることが出来る人は希です」。洛浦は黙りました。夾山はそれを見て、洛浦を打ちます。洛浦はこれによって真に弟子となることが出来たのです。

【釈意】

洛浦は臨済に学んだ後、夾山の元に來たのであるが、値踏みをするようにして夾山の力量を量つた。夾山はそんな傍若無人な洛浦に対し、「臨済の真似をするだけの小者には用がない」と挑発する。洛浦は、今度は下手に出て、「遠方からあなたを慕つてきたのです。一つ教えを説いて下さい」と言つて夾山の様子を覗つた。夾山は、眼前に見える姿は仏教の入口に過ぎないと言い、仏教の基本を伝えた。その夾山に対し洛浦は、臨済が教えた分別を離れる意味の「喝」を使い、「そんなこと知っている」と臨済の教えを發揮した。夾山は洛浦が概ね同調したことを知りつつ、更に続けて言つた。世の中は「喝」で仏法を語ることもできるが、同じ表現であっても境地は異なるものだ。無舌の人（悟つた人）は悟りを伝えることができないと、どのように仏法を伝えるのか。それを聞いて、洛浦は分からなくなり黙つてしまった。そこで夾山は、臨済のもとで学び、悟りを理解して天狗になつていた洛浦を一棒した。洛浦は、自分が悟に至ることしか考えてなかつたことを悟つた。その時、初めて礼拝す

【訓読】 挙す。馬大師不安。院主問う。和尚 近日尊位如何。大師云く、日面佛。月面佛。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。馬祖道一が病床の時、院主が「和尚様、近頃の体調はいかがですか」と尋ねました。馬祖は、「日面仏、月面仏」と答えました。

【釈意】

病床に伏していた馬祖を、寺院を管理する役職の僧が見舞いにきた。体調を気遣う僧に対して、「日面」といい長寿であろうとも、「月面」といい一日一夜の命であろうとも仏であるといっている。目前の事実こそが真実であるとすれば、生命の長短、病気を嫌悪分別する必要はない。どのような状態であっても、それが仏の教えである。また、馬祖が「仏」を引用したことから、病気が重く、臨終間際ではないかと考えられる。

【頌】 頌曰。日面月面。星流電巻。鏡対象而無私。珠在盤而自轉。君不見 鈇鎚前百鍊之金。刀尺下一機之絹。

【訓読】 頌に曰く。日面月面、星流れ電巻く。鏡は像に対して私なし。珠は盤に在りて自ら轉ず。君見ずや、鈇鎚の前、百鍊の金。刀尺の下、一機の絹。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。月面は、流星の如く、電光石火のように瞬間的に過ぎ去ります。鏡は、ありのままの姿を写し出し、私見の入る余地はありません。玉は、凹凸がないので、自由自在にお盆の上を転がることができます。どう見えるでしょうか。鍛冶で金はより良い鍬や鎌になります。ハサミや定規を使い縫製することで絹は上質な着物に仕立てあがります。

【釈意】

日面佛。月面佛の放つ慈悲の光は、流れ星や雷のように一瞬の光で、観る者に分別する余地を与えない。鏡に曇りが無ければありのままを写すように、欲望が無ければありのままの姿が写るのだ。そして、盤上の玉が障害なく自在に転がるように、自分の思いを込めたり、何の分別も入れず平らかであるから自在なのである。それらが、悟りの世界である。馬祖は、百鍊の金のように長く鍛えられ、一機の絹が一瞬、一瞬を折り重ねて布になるように、修行を重ねたのだ。日面佛。月面佛とは、馬祖の修行の終着点であろう。

【語彙】

【碧巖録】第三則に同じ。【馬大師】馬祖道一（707〜788）南嶽懷讓の法嗣。【不安】身に病のあること。【院主】寺院の事務一切を主宰する管理者。監司、監寺。【日面佛月面佛】面佛は一八〇〇歳の長寿を保つとされる。月面佛は一日一夜の寿命を保つとされる佛の名。【日面月面】日面佛月面佛の相貌。一切衆生

を救う慈悲の光を放つとされる。

第三十七則 瀉山業識

【本則】 挙。瀉山問仰山。忽有人問一切衆生但有業識茫茫無本可拋。子作麼生驗。仰云。若有僧來即召云。某甲。僧廻首。乃云。是甚麼。待伊擬議。向道、非唯業識茫茫。亦乃無本可拋、瀉云。善哉。

【訓読】 挙す。瀉山 仰山に問う。忽ち人有りて一切衆生但だ業識茫茫として本より拋るべき無きありやと問わば。作麼生か驗みん。仰云く。若し僧の來たることあらば即ち召して云わん。某甲と。僧首を廻らさば。乃ち云わん。是れ甚麼ぞと。彼が擬議せんを待つて。向かつて云わん。唯業識茫茫たるのみに非ず。また乃ち本の拋るべきなしと。瀉云く。善いかな。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。瀉山は仰山に質問します。「突然、人が来て、すべての人々は煩惱の輪廻が生じ、それに拋るべきではないが、この煩惱をどのように確かめることができるでしょうか」仰山は言います。「もし、そのような僧が来たならば、すぐに召集し、某甲の名を呼びます。僧がその呼びかけに振り返って、なんでしょうか、と尋ねたなら、僧に言います。煩惱の輪廻は、どこにも拋る必要はないのです」それを聞いて、瀉山は、それでよいとしました。

【釈意】

瀉山は弟子の仰山を試す意味で、対立による分別意識（業識）の働きがどこから生じ、その抛りどころをつくるべきではないが、この分別意識を明るみにできるか、と問いかけた。仰山は、名前を呼んで振り返った瞬間には、分別意識は存在しない。しかし、擬議した時点で分別意識が生じていると答えた。それにより、瀉山の贊同を得たのである。

【頌】 曰く。一喚廻頭我知不。依希蘿月又成鈎。千金之子纔流落。漠漠窮途有許愁。

【訓読】 頌に曰く。一たび喚べば頭を廻らす我を知るや否や。依希として蘿月又鈎となる。千金の子纔かに流落して。漠漠たる窮途して許愁あり。

〔和訳〕

天童寛和尚が頷にいました。「おい」と呼ばれて振り返ったとき、その人は返事をした自分という存在の本体を知っているでしょうか。カズラ（植物）を通して満月を見ても、三日月のように見えてしまっています。富豪の子も誤って家を出てしまえば、たちまち困窮し、乞うことになるでしょう。

〔語彙〕【瀉山】瀉山靈祐（771～853）瀉仰宗の祖。

【仰山】仰山慧寂（807～883）瀉山の法嗣。【業識茫茫】業識は、根本無明の力によって生じた不覚の心。茫茫は広く果てしないさま。業識がか切りなく輪廻し、業識にくらまされている妄想のさま。【依希】はつきりしない様。【鉤】釣り針の意。ここでは、三日月を指す。

第三十八則 臨濟真人

【本則】擧。臨濟示衆云。有一無位真人。常向汝等面門出入。初心未證據者看看。時有僧問。如何は無位真人。濟下禪床擒住。這僧擬議。

濟托開云。無位真人。是甚乾屎橛。

〔訓読〕 擧す。臨濟衆に示して云く。一無位の真人有り。常に汝等が面門に向かつて出入す。初心未證據の者は看よ看よ。時に僧有りて問う。如何なるか是れ無位の真人。濟禪牀を下りて擒住す。這の僧擬議す。濟托開して云く。無位の真人。是れ甚の乾屎橛ぞ。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。臨濟義玄が修行僧達に次のことを垂示されました。「何者にもとられない自由な人というものがあって、常にあなた達の口から出たり入ったりしています。修行を始めたばかりでわからない者は、よく見てみなさい」と。ある時、修行僧が臨濟に尋ねました。「とらわれない自由な人とはどのようなものでしょうか」と。臨濟は椅子から下りて僧の胸倉を掴みました。僧がうろたえると、臨濟は突き放して言いました。

〔釈意〕

煩惱があれば、モノの本質をしつかり見ることができないのである。本来、仏であるにも関わらずそのことを自からも気づかないのである。

〔釈意〕

無位の真人とは迷悟、凡聖といった分別を超越した本来の自己と言い換えることができるだろう。それが体から出入りしていることは、人間の行住坐臥という日常生活全般こそ禅の修行であることを表している。仏道修行の初心者はこの世界とは別のどこかに悟りがあると意識しがちであるが、悟りの境地には日常生活の大切さに気づかないものには到底辿り着けないと示唆したのである。質問した僧は、そうした自己が自分とは別に存在するかのようには分別してしまつた。

「とらわれない自由人は、こんな乾ききった糞になってしまったぞ。」

臨済が胸倉を掴んだのは僧そのものが真人であることを行動によって示したと言える。

【頌】 頌曰。迷悟相返。妙伝而簡。春坼百花兮一吹。力迴九牛兮一挽。無奈泥沙撥不開。分明塞斷甘泉眼。忽然突出肆橫流。師復云。險。

【訓詁】 頌に曰く。迷悟相返し。妙に伝えて簡なり。春は百花を坼かせて一吹し、力は九牛を廻らせて一挽す。奈んともすること無し泥の撥えど開かざるを。分明に塞断す甘泉の眼。忽然と突出して肆に横流す。師復た云く。險。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいいました。迷いと悟りは相反しているようですが、実は一体で簡単明瞭なことであると伝えられました。それは、一陣の春風が多くの花を開花させ、力を合わせて多くの牛が臼を挽きます。しかし、泥を払いのけても塞がっているのはどうしようもありません。井戸が詰まるように僧の眼も塞がっているのは明らかです。突然に栓が抜けたように縦横無尽に水が流れ出すことがあります。臨済がまた言います。危険です。

【釈意】

臨済のいう真人に迷悟という区別はない。これこそ仏教が脈々と伝えてきた教えのひとつである。春になって花が咲き、農夫が牛を引いて畑を耕すということは、毎年繰り返される日常の光景である。ここでは常に我々に出入りしているという真人が、ありふれた生活の中に息づいていることに重ね合わせられているといえるだろう。また、胸ぐらを掴み上げて突き放した臨済の行為が、春の風と牛を引く力のようにであると評価している。質問者の僧の目は分別という泥によつて塞がっている。しかし、井戸の口が塞がっていても、その奥には清涼な水が湛えられており、ひとたび目を開いたならば、自在に禅機を働かせるであろう。

【語彙】 【臨済】 (? ~ 867) 唐代の禅僧。臨済宗の開祖。曹州南華(山東省)の人。黄檗希運の法嗣。【無位真人】 凡聖迷悟を超越した真の解脱人。もとは道教の理想としての自由人を指した。【面門】 口または感覚器官全般を指す。【證據】 確かな拠り所。証明する、わかる。【禅牀】 僧堂内の坐禅をする場所。単。住持ならば椅子。【擒住】 掴むこと。【托開】 ぱつと放すこと。【甘泉】 井戸を掘ると水が出てくる口を指す。【乾屎橛】 乾いた野糞。

第三十九則 趙州洗鉢

【本則】 擧。僧問趙州。學人乍入叢林。乞師指示。州云。喫粥了也未。僧云。喫了。州云。洗鉢盂去。

〔訓読〕 挙す。僧 趙州に問う。学人乍入叢林。乞う師の指示するを。州云く。喫粥了るや未や。僧云く。喫了る。州云く。鉢盂を洗い去れ。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。ある僧が趙州從諗に尋ねました。「柄は仏道修行を始めたばかりの僧です。どうかご指導をよろしくお願いいたします」と。趙州が言いました。「朝食は食べ終わりましたか」と。僧が言いました。「食べました」。すると趙州は「器をあらっておきなさい」と言いました。

〔釈意〕

趙州に指示を仰いだ修行僧は、修行生活が日常から隔絶した特別な世界であると捉えていたのであろう。このように常・非常という価値判断を下して生きることから離れなければならない。食事・坐禅・読経の間に軽重の別はなく、生活の中の行為一つ一つが禅の修行となるべきであることを趙州は説いている。

〔頌〕

頌曰。粥罷令教洗鉢盂。豁然心地自相符。而今參飽叢林客。且道。其間有悟無。

〔訓読〕

頌に曰く。粥罷めば鉢盂を洗はしむ。豁然として心地自ら相符す。而今參飽す叢林の客。且く道え、其の間悟有りや無しや。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。粥を食べたら器を洗わせませす。迷いが消えて、心は本来の自己と一体となります。今日の修行者は仏教を十分に参究しています。彼らの中に悟りを得た者がいるかどうか答えなさい。

〔釈意〕

趙州が食後に洗う物をするという平凡な行為で僧を導くのは、煩瑣な思慮分別から離れ、からりと晴れ渡る空のような悟りの境地である。修行に徹底している人間は、自分が生きている普段の姿に計らいを入れることはない。生活の要素一つ一つに序列をつけない事がわかれば、悟りだとか悟りでないという議論はもはや不要となり、普段のままであることで問題は解決しているのである。

〔語彙〕

〔趙州〕 趙州從諗(778〜897)。第九則を参照。〔乍入〕 たちまちの意。転じて始めて間もないこと。〔叢林〕 僧侶が一所で修行することが林のように静かであることから禅の修行道場をさす。〔鉢盂〕 僧侶の使う食器のこと。〔豁然〕 からりと開けるさま。迷っていた心が晴れる様子。〔心地〕 心は一切法を生じさせ、あたかも大地が草木を生じさせるようであることから心地といった。〔而今〕 目下、只今の意。

第四十則 雲門白黒

【本則】 挙。雲門問乾峰。請師答話。峰云。到老僧也未。門云。恁麼則某甲在遲也。峰云。恁麼那恁麼那。門云。將謂侯白。更有侯黒。

【訓読】 挙す。雲門、乾峰に問う。師の答話を請う。峰云く。老僧に到るや。門云く。恁麼ならば則ち某甲遅きに在り。峰云く。恁麼那恁麼那。門云く。將に謂えり侯白。更に侯黒有り。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。雲門文偃和尚が乾峰和尚にたずねました。「和尚さま、私に一説お願いいたします」。乾峰は言いました。「私の所へ来たことがありますか」。雲門は「そのように仰られるなら、私は出遅れたでしょう」と言いました。乾峰が言いました。「そうだろう、そうだろう」。雲門は「乾峰は奸智に長けた盗賊として知られた侯白と謂えるでしょう。さらに侯白を出し抜いた侯黒がいます」と言いました。

【頌】 頌曰。弦管相銜。網珠相對。發百中而箭箭不虛。撰衆景而光光無礙。得言句之總持。住游戲之三昧。妙其間也宛轉偏円。必如是也。縦横自在。

【訓読】 頌に曰く。弦管相銜み。網珠相對す。百中を發して箭箭虚しからず。衆景を撰めて光光礙するなし。言句の總持を得。游戲の三昧に住す。其の間の妙や宛轉偏円。必ず是の如く縦横自在。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。弓の弦に矢が番えられて張りつめており、網に結び付けられた宝石のそれぞれに光が映りこんでい

宏智頌古百則の研究(二)(佐藤)

【釈意】

乾峰の問いかけ自体が説法になっている。乾峰の問いに「到・不到」で答えることと二見という分別に陥るが、雲門は遅くなったと答えてどちらかに偏ることを避けた。質問の真意を察した雲門を乾峰は評価し、雲門は盗賊が騙し合った故事を用いて互いが同じく悟りの境地にあることを表している。また、「到・不到」を悟りに至ったかどうかと受け取ると、「老僧」は先仏・祖師がたが見えた本来の面目、仏性と考えることができる。

【釈意】

両者のやりとりは力の均衡を保っている弓矢や、網につけられた無数の宝石が互いの姿を映し合っている様子に喩えられている。そのような師弟関係の中か

ます。矢を放てば虚しく空を切ることなく的を射て、寶石に影が映りこんで光を遮ることはありません。彼らは仏説を護持し、分別を離れて自由自在の境地にあります。二人の間のやりとりの巧みさは、差別と平等を行き来するところにあり、歴代の祖師がそうであつたように縦横無尽で自在です。

【語彙】 雲門 雲門文偃(864-949) 雪峰義存の法嗣。【乾峰】 乾峰(生没年不詳) 唐末の僧。洞山良价の法嗣。【侯白・侯黒】 共に盜賊の名前。どちらもどちら、上には上がいるという意味。【網珠】 帝釈天宮に張り巡らされた網。結び目に寶石が付けられており、それらが互いの姿を映し合う。【総持】 陀羅尼のこと。また、悪法を捨てて善法を持する意で、仏の説くところをよく記憶して忘れないこと。【宛転】 転じめぐる様。

第四十一則 洛浦臨終

【本則】 挙。洛浦臨終示衆云。今有一事。問爾諸人。這箇若是即頭上安頭。若不是即斬頭覓活。時首座云。青山常舉足白日不挑燈。浦云。是甚麼時節作這箇說話。有彦從上座出云。去此二途請師不問。浦云。未在更道。從云。某甲道不盡。浦云。我不官爾道盡道不盡。從云。某甲無侍者祇對和尚。至晚。喚從上座。爾今日祇對甚有来由。合體得先師道。目前無法意在目前。他不是目前法。非耳目之所到。那句是賓。那句是主。若揀得出分付鉢袋子。從云。不會。浦云。汝合會。從云。實不會。浦喝云。苦哉苦哉。僧問。和尚尊意如何。浦云。慈舟不棹清波上。劍峽徒勞放木鵝。

【訓読】 挙す。洛浦臨終に衆に示して云く。今一事有り。爾諸人に問う。這箇は若し是というは即ち頭上に頭を安ず。若し不是ならば即ち頭を切つて活を覓む。時に首座云く。青山は常に足を挙げ白日燈を挑げず。浦云く。是甚麼の時節にして這箇の說話を作すや。彦從上座有り、出て云く。此の二途を去つて請う師問わざれ。浦云く。未在更に道え。從云く。某甲道い尽さず。浦云く。我れ爾が道い尽すと道い尽さざるとに管せず。從云く。某甲侍者の和尚に祇對する無し。晩に到つて從上座を喚ぶ。爾今日の祇對甚だ来由有り。合に先師の道を体得すべし。目前に法無く意目前に在り。他は是れ目前の法に非ず。耳目の到る所に非ずと。那句か賓 那句か主、若し揀得出せば鉢袋子を分付せん。從云く。不會。浦云く。汝会すべし。從云く。實に不會。浦喝して云く。苦なる哉 苦なる哉。僧問う。和尚の尊意如何。浦云く。慈舟清波の上に棹さず。劍峽徒らに木鵝を放つに勞す。

ら生まれる修行の道は、的を射抜くように悟りから外れることはない。そして宝珠の結びつけられた網のように、すべての存在や現象はひとつなかりに連なっており、互いに関わり調和し合っていることを示している。雲門と乾峰はこの事を既に体得しており、偏と円、世俗と悟りのどちらの世界にも留まる続けるということはなく、ありのままに生きているのである。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。洛浦元安の命運がまさに尽きようとする時に大衆に向って言いました。「今この時に言いたい事が一つだけあります。皆さん方に問います。このことがもし是というならば全くいらぬ心配です。また不是ならば、頭を切り落としても生を求める事になるのです」。その時、首座が言いました。「青山は常に動いており、雲がない昼間では灯りはいらぬのです」と。洛浦はいいました。「一体何のために今の話をしたのですか」。すると彦従上座が現れて答えました。「ふたつの答え以外何も答えることができません」。洛浦は「いいやまだまだ、さらになにか言ってみなさい」と言いました。彦従は「衲にはこれ以上は答えられません」と言いました。洛浦は言いました。「衲はあなたが答えきろうと、答えきれなかったとしても何も気にしませんと」。彦従は答えました。「私が答えると、侍者が答えることが出来なくなります」と。夜になつてから彦従上座を呼びました。「あなたの今日の答え方には見どころがあります」と言いました。まさにあなたは先代の夾山善会の教えを体得すべきです。目の前には法は無く、こころは目の前に在るのです。それは目の前の法ではなく、耳や目で捉えることは出来ないのです。どのことばがもてなして、どのことばが迎えるのでしょうか。もし選び出すことが出来れば、教え伝える事が出来ます。彦従は「衲にはわかりません」といいました。洛浦は言いました。「あなたなら自分のもの出来るでしょう」。彦従は「本当にわからないのです」と答えました。洛浦が声をはりあげて言いました。「まいつ

宏智鎮古百則の研究(二)(佐藤)

〔釈意〕

洛浦の命が尽きそうになる時の場面である。洛浦が自分の命が後わずかであることをさとり、大衆に向って話すのである。最初に是と不是で修行する意味を聞く。今の姿は仏であるならば、なぜ修行しなければならぬのかを聞いていゝる。その問いに対して首座が青山は常に足を挙げ、白日燈を挑げずと答えたのである。山も常に四季を通してその姿は一定ではなく、昼間にあかりを灯すことはないという。これはありのままの真実であり、諸法実相のことを言っている。しかし、洛浦は首座になぜ今のような答えを言ったのかを聞くのである。そこへ彦従和尚が「二途を去つて請う師問わざれ」と答えるのである。二途とは洛浦が題材にした是と不是のことである。彦従は洛浦が題材にした是と不是はなく、とりあげたら答えられないと言う。しかし洛浦はまだ物足りないと言ひ答えを求めるが、彦従は次に答えたなら侍者が答えられないと言つて終わらせるのであつた。この対応に見どころがあると感じた洛浦は、夜になつて再び彦従を呼ぶのである。禅宗では、法を伝えるときは余人に知られぬよう、夜に行うことが多い。そのため洛浦が夜になつてから彦従を呼んだのは、彦従に真に教えを伝えるべきだと判断したためだと言へる。洛浦は最後の問答を彦従に問ひかけるのである。この問答を透過出来れば、彦従は洛浦に認められることになるのである。しかし彦従は不会、わかりませんと言つた。すかさず洛浦は会すべしと言ふが、本当にわからないと彦従は答えたのである。修行僧が洛浦の心情を聞くのである。洛浦は「慈舟清波の上に棹さず、劍峽徒らに木鷓を放つに勞す」と言うのである。波が穏やかならば棹は使う必要はなく、川の流れを確かめるために木鷓を放つと言うのである。修行者を育成するにあつて、師が何の手助けをせずとも悟りの境地に達する者もいれば、一から十まで教えて悟りの境地に達する者もいることを意味している。

た、まいった」と。ある僧侶が聞ききました。「お師匠様は一体どのように思っておられるのですか」と。洛浦は答えました。「舟は穏やかな波では棹を使う事はなく、険しい谷に入った時、木鵝を放って進む道を探して苦労するのです。」

【頌】 頌曰。餌雲鉤月釣清津。年老心孤未得鱗。一曲離騷帰去後。汨羅江上独醒人。

【訓読】 頌に曰く。雲を餌とし月を鉤として清津に釣る。年老いて心孤にして未だ鱗を得ず。一曲の離騷帰りて去つた後。汨羅江上独醒の人。

【和訳】

天童和尚が頌にいいました。雲を餌にして、月を釣り針にして清津の港で釣るのです。年をとって心が孤独ならば、鱗を得ることはないのです。屈原は離騷の詩を作つた後に汨羅の川に身を投じたのです。

この最後の句は第三五則の洛浦伏庸での夾山善会と洛浦の二人をあらわしているのである。洛浦は夾山によって自分の未熟さに気づいて悟つた訳であるが、今回の洛浦と彦従のようにうまくいかない時もあるのである。

【釈意】

夾山の教えを餌にして、洛浦が釣り針となって弟子を得ようとしたのである。年老いて寿命がわずかであった洛浦は弟子を得ようとしたが、彦従の悟りの境地在洛浦の思いに叶わなければ弟子を得ることは出来ないのである。そんな洛浦の心境を、中国戦国時代の政治家であつた屈原の詩であらわしているのである。

【語彙】 【洛浦】 洛浦元安（834～899） 姓は淡氏。夾山善会の法嗣。また第三十五則にも登場。【先師】 夾山善会（805～899）のこと。【臨終】 命がまさに尽きようとする瞬間。【一事】 一つのことから。わずかに一つの事。【頭上に頭を安ず】 頭は一つあれば足りるのに、頭の上にさらに頭を重ねる事から無用、不必要の意。

【是・不是】 是は正しい、適切。また正しく妥当であること。不是はちがう、否定、いけないの意。【白日】 曇りのないかがやく太陽。また白昼、昼間の事。

【時節】 とき。時間の経過、適当な機会。【祇對】 相手に対すること。禪問では、応答、対話の意。【鉢袋子】 鉢囊。鉢袋。応量器などを収める袋のこと。【清津】 静かな池、水辺、きれいな水のこと。【離騷】 「離」は遭う、「騷」は憂いで憂いに合う意。中国の戦国時代、楚の屈原の詩で、讒言によって王に追放され、失意のあまり投身を決するまでの心境を夢幻的にうたつたもの。【屈原】（紀元前340～278）。中国・戦国時代の楚の政治家・詩人。楚の王族に生まれ、懐王に仕え内政・外交に活躍したが、讒言により次の王に追放され、放浪の果てに、汨羅に身を投じたという。汨羅江に身を投じる前に「世人は皆酔えり、われ独り醒めたり。」と書いて死んだ。

第四十二則 南陽浄瓶

【本則】 挙。僧問南陽忠国師。如何是本身盧舍那。国師云。与我過浄瓶来。僧將浄瓶到。国師云。却安舊處著。僧復問。如何是本身盧舍那。国師云。古佛過去久矣。

【訓読】 挙す。僧 南陽の忠国師に問う。如何なるかは本身の盧舍那。国師云く。我が与に浄瓶を過ごし来たれ。僧。浄瓶を將つて到る。国師云く。却つて旧所に安ぜよ。僧復問う。如何なるかは本身の盧舍那。国師云く。古仏過ぎ去ること久し。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。ある僧が南陽国師に問いました。「本身の盧舍那仏とはどのようなものですか」と。南陽国師は答えました。「私のために浄瓶を持ってきて下さい」と。僧は南陽に浄瓶を持ってきました。国師は言いました。「では再びもとの所に戻してきて下さい」。僧は再び問いました。「一体何が本身の盧舍那仏なのですか」と。国師は答えました。「古仏は過ぎ去り古いものとなりました」と。

【頌】 頌曰。鳥之行空魚之在水。江湖相忘雲天得志。疑心一絲対面千里。知恩報恩人間幾幾。

【訓読】 頌に曰く。鳥の空を行き 魚の水に在る。江湖相忘れ 雲天に志を得る。擬心一絲なれば 対面千里。恩を知り 恩を報じ 人間幾幾ぞ。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。鳥は空を飛びまわり、魚は水の中で泳ぎまわります。川や湖を忘れ、空や天界を得ます。一本の細かな糸のように少しでも疑う心があると、顔と顔が向かい合っ

【釈意】

修行僧が本物の毘盧舍那仏とはどのようなものですかと質問するのである。修行僧はどのようなものが仏、仏性であるかを盧舍那でたとえて南陽に聞くのである。修行僧の問いに対して南陽国師は浄瓶を持って来させて、さらにすぐ元の場所に戻させるように言うのである。なぜこのような行為をさせたのかというと、修行している本人こそが仏性なのであるということであらわしているのである。自分自身にある仏性をこの僧は外に求めてしまったのである。南陽は仏性を外に求めていた僧に自分で見出すように言ったのである。

【釈意】

鳥が空を飛ぶのも、魚が水の中を泳ぐこともごく普通のことである。鳥は空を飛ぶことで鳥であることをあらわし、魚は泳ぐことで魚であることをあらわしているのである。これは人には誰しも仏性がそなわっていることを意味する。

いても心が通じ合わないものです。恩を知り、恩に報いる人はどれくらいいるのでしょうか。

しかし誰もがそのことを気づかずにいる。それを「江湖相忘れ」で表現している。修行僧に対して南陽は浄瓶を持ってこさせて、また元の場所に戻させたことで、今の修行僧が真実のものであることを教えようとしたのである。しかし、いくら南陽が修行僧に行動させて教えようとしても、南陽と修行僧の心が通じ合っていないければ、伝わるものも伝わらないのである。

【語彙】

【南陽忠国師】南陽慧忠(？～775) 姓は冉氏。六祖慧能の法嗣。また国師とは一国の天師として仰がれる高僧のこと。【盧舎那】毘盧舎那仏のこと。華嚴宗で、蓮華蔵世界に住み、全宇宙をあまねく照らす仏の事。【浄瓶】浄水を貯えるための瓶。僧は常にこれを携帯し、手を浄めるのに用いていた。【江湖】三江五湖の略。広く世間、天下四方の意に用いる。また江湖会の略。馬祖道一は江西に、石頭希遷は湖南で禪風を振り、修行者はこの両師の下に参集し相い往来して修行したことから、広く諸方の僧が集まり結制安居の修行する会を江湖会、略して江湖。【対面千里】顔と顔とが向かい合っけていても、心が通じ合っなければ千里を隔てているのと同じだという意。

第四十三則 羅山起滅

【本則】 拳。羅山問巖頭。起滅不停時如何。頭咄云。是誰起滅。

【訓読】 拳す。羅山巖頭に問う。起滅不停の時如何。頭咄つして云く。是誰が起滅すや。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。羅山が巖頭に問いました。「起滅不停の時とは一体どのようなことなのですか」といいました。すると巖頭は叱りつけるように云いました。「一体、誰が起滅したのだ」と。

【釈意】

羅山は巖頭に向かつて起滅不停の時ほどのようなものかと聞くのである。起滅不停とは生滅してとどまることが無いことであるが、ここでは煩惱のことである。羅山は煩惱が生じて無くならない時はどのようなものかと聞くのであった。しかし、巖頭は一体どこに煩惱が無い人がいるのだと答えたのである。食欲、睡眠欲などは誰にでも具わっているのである。一瞬一瞬のこの時にうつろい変わっているなかで、いかにそういった感情を否定するのではなく、ありのまま受け取ることが重要なのである。

【頌】 頌曰。斫断老葛藤。打破孤窠窟。豹披霧而換文。龍乘雷而換骨。咄。起滅紛紛是れ何物。

【訓読】 頌に曰く。老葛藤を斫断し孤窠窟を打破す。豹は霧を披きて文を変え、龍は雷に乗じて骨を換う。咄。起滅紛紛是れ何物ぞ。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。迷いや悩みを断ち切り、また迷いの煩惱を打ち砕くのです。豹は霧を披て彩りに変え、龍は雷に乗って骨を換えてしまうのです。さて、起滅とは一体何なのでしょうか。

【釈意】

霧が晴れば豹の体にある模様が見えるようになり、普段は湖の底にいる竜が、雷に乗じて姿を現すという意味である。転じて、今の自己を脱却しなくては、真の自己を得られないことである。本則では、羅山が煩惱の無い境地を求めていたが、煩惱がない人はどこにもいないのである。煩惱があることは悪であり、無いことが善であるというのも分別である。分別している自己を離れることが必要なのである。

【語彙】

【羅山】 羅山道閑（生没年不詳）巖頭全豁の法嗣。【巖頭】 巖頭全藏（828～887）徳山官鑑の法嗣。【起滅不停】 生じ滅して停まらない事。【窠窟】 巢は鳥の巢、窟は獣のすむ穴。また、ねぐら、いつも帰着するところ。迷悟・凡聖等の二見対待にとらわれた迷妄邪見の落とし穴のこと。

第四十四則 興陽妙翅

【本則】 舉。僧問興陽剖和尚。娑竭出海乾坤靜。觀面相呈事若何。師云。妙翅鳥王當宇宙。箇中誰是出頭人。僧云。忽遇出頭時。又作麼生。

陽云。似鶴捉鳩。君不覺。御樓前驗始知真。僧云。恁麼則又手當胸退身三步。陽云。須彌座下烏龜子。莫待重教點額痕。

【訓読】 挙す。僧 興陽の剖和尚に問う。娑竭海を出て乾坤静かなり。觀面相呈する事若何。師云く。妙翅鳥王宇宙に当る。箇中誰か是れ出頭の人。僧云く。忽ち出頭に遇う時又作麼生。陽云く。鶴の鳩を捉うるに似たり。君覚えざれば御樓前に驗し始めて真を知れ。僧云く。恁麼ならば則ち又手當胸し退身三步す。陽云く。須彌座下の烏龜子。重ねて額に痕を点ぜしむを待つこと莫かれ。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。ある僧が興陽山の清剖に尋ねました。

「娑竭が海から出てくると世界が静かになるといいます。これが

【釈意】

娑竭は竜の王とされる架空の動物である。質問した僧は自分を娑竭に例えて清剖を試している。海に出るとは具体的には悟りを得たじぶんが清剖の前に進み

いきなり目の前に現れたらどうでしょう」と。師匠が言いまして。「竜を食べるという妙翅鳥王が宇宙に現れます。このような中で誰が頭を出せるでしょう」。僧が言いました。「もし頭を出した時はどうでしょうか」。清剖は「鷹が鳩を捕まえるようなものです。それがわからなければ楼閣の前に首を曝してそれが本物かどうか知りなさい」。僧が言いました。「そうまで言われるならば、叉手して三步退きます」。清剖が言いました。「須弥壇の下にいる亀よ。何度も額をぶつけて痕を残すのを待っていてはいけません」と。

【頌】 頌曰。絲綸降號令分。寰中天子塞外將軍。不待雷驚出蟄。那知風邊行雲。機底聯綿兮。自有金針玉線。印前恢廓兮。元無鳥篆蟲文。

【訓読】 頌に曰く。絲綸降り号令分る。寰中は天子塞外は將軍。雷に驚きて蟄の出づるを待たず。那ぞ知らん風行雲を退むるを。機底聯綿として自ら金針玉線有り。印前恢廓として元より鳥篆蟲文無し。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。勅令が下り号令が発せられます。宮中には皇帝、国境には將軍がいます。雷に驚いて虫が春を待たず地表に出てきます。どうして風の力が流れる雲をとどめることもあると知っているだろう。連綿とした機織りの布は、自然と金針と玉線によって織られています。印字が無かった昔には鳥の足跡や虫食いから生まれた文字も無かったのです。

出たことを指している。清剖は娑竭を凌駕する妙翅鳥王に自分を諭えて修行僧を戒めた。「御楼前驗」は趙の平原君に関する逸話に拠る。是を踏まえて清剖は僧の悟りが本物かどうか確かめようとした。清剖の言葉に退いてしまった僧は、須弥壇を支える亀の彫刻のようなものであり、その段階からは抜けられないと許さなかった。頭に傷を残すとは、未熟な段階では師には認めてもらえないことを指している。

【釈意】

中央には天子が政を行い、国境では將軍が警備をする。これは自明の理であり、それぞれが自己の役割を果たしている。師弟関係に置き換えれば、それぞれが修行の過程で各自の働きを全うすることである。冬の雷が虫の冬眠を覚ますことがあるように、僧は自分が悟ったと勘違いをして清剖の前に出てきてしまった。風によって雲が流れを止められることがあるように、僧もまた清剖によって行き過ぎた行動を嗜められたのである。このような師弟のやり取りが釈尊の時代から連綿と受け継がれてきた。それは教典を重んじるよりも先仏が行動によって示してきたことなのである。文字が書き込まれる前の紙面が真っ白であるように、あるがままの姿そのままだが目指すところであると示している。

【語彙】

【興陽剖】興陽山清剖のこと。大陽警玄の法嗣。【娑竭】娑竭羅は海を指しており、またそこに住む龍王のこと。【觀面】面と向かうこと。まのあたりに見る。【妙翅鳥王】蛇の毒から護ってくれる聖なる鳥。別称金翅鳥・迦樓羅鳥。【御樓前驗】趙の平原君のもとに居た足の不自由な食客が、自分を笑った女中を処刑して首をよこすように求めた。しかし、平原君が無視していると他の家来が見限って去ってしまった。平原君は違う女中の首を斬って曝したが、偽物と見抜かれてさらに食客が去って行った。泣く泣く平原君は笑った女中の首を斬って家来に戻ってきたという。【須彌座】仏像を安置する壇。【鳥龜子】陸龜。須彌壇に施された龜の彫刻を指す。【絲繭】天子の言葉、命令。【寰中】天子直轄の地域。国内。【蟄】虫が土中で冬ごもりすること。【聯綿】長く続いて絶えないさま。【恢廓】心が広く度量が大きいこと。【鳥篆蟲文】虫食いの跡や鳥の足跡から文字が作られたこと。また鳥蟲篆と呼ばれる古代の篆書文字の一種。

第四十五則 覚経四節

【本則】擧。圓覺經云。居一切時不起妄念。於諸妄心亦不息滅。住妄想境不加了知。於無了知不辨真實。

【訓誦】擧す。円覚経に云く。一切時に居して妄念を起こさず。諸の妄心に於て亦息滅せず。妄想の境に住して了知を加えず。了知無きに於て眞実を弁ぜず。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。『円覚経』にこう書かれています。どのような時にあつても妄念を起こさず、様々な妄想が起きたとしてもそれを無くそうとしない。妄想の世界にあつては知識でとらえようとせず、分別する必要がないからといって、それが眞実、仏性であるかのように扱わない、と。

【釈意】

日常生活では、ありのままを受け入れて迷いの心を起こさない。それは迷いの心そのものをも受け入れることである。妄想が起こるのは、対象を眼耳鼻舌身意の感覚によつて捉え、それを認識し分別するからである。それ故に分別を挟まずに眼前のすべてを諸物を受け止めることが必要である。しかし分別する必要が無いからといって今のすべてが正しいと考えてはならないのである。今のままと、ありのままとは天地の如く隔たっているのである。

【頌】

頌曰。巍巍堂堂。磊磊落落。鬧處刺頭。穩處下脚。脚下線斷我自由。鼻端泥盡君休斷。莫動著。千年故紙中台藥。

【訓誦】

頌に曰く。巍巍堂堂。磊磊落落。鬧處に頭を刺し隱處に脚を下す。脚下線断ちて我自由。鼻端泥尽き君断るを休めよ。動著すること莫れ。千年故紙中の台藥。

〔和訳〕

天童寛和尚が頷にいました。仏の智慧を得た人は堂々としていて小さなことに拘らないのです。騒がしい場所にも、静かな場所にも好悪なく足を運びます。足につながれていた紐は切れて自由になりました。鼻の先に付いていた泥は取れているので払い落とす必要はありません。分別の心を起こして慌てふためくのを止めなさい。千年前からの葉が紙の中にあります。

〔語彙〕『円覚経』『大方広円覚修多羅了義経』の略。円満な悟りに関する大乘経という意味である。仏が十二菩薩の質問に対し、円覚妙心とそれを悟るための修行について説いた経典。【妄念】煩惱によって引き起こされる、邪悪な思いや誤った考え。【妄心】煩惱にけがされた心。迷いの心。誤った心。【了知】事柄の内容・事情などを悟り知ること。【巍巍】山などが高く大きいさま。徳の高いさま。【磊磊】石が高く積み上っている様子。【闇処】騒がしい場所。【鼻端泥尽】第二則「達磨廓然」に既出。『荘子』にある故事からの引用。【動著】動くこと。

第四十六則 徳山学畢

【本則】 擧。徳山圓明大師。示眾云。及盡去也。直得三世諸佛口掛壁上。猶有一人呵呵大笑。若識此人。參學事畢。

〔訓読〕 挙す。徳山円明大師。衆に示して云く。及尽し去るや。直に得たり三世諸仏の口壁上に掛けるを。猶一人有って呵呵大笑す。若し此の人を識らば参学の事畢る。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。徳山縁密が大眾に言いました。「仏教を極め尽くしてしまうと、三世諸仏でも口を閉ざすということが直裁にわかりました。それでもまだ一人大笑いしている者がいます。もしこのことがわかれば修行は完成するのです」と。

〔釈意〕

悟りを開いた仏の様相とは、堂々としてあらゆるこだわりがない。また、騒がしさと静けさと、こだわり無く両方を行き来する。その様はあたかも足かせが外れて自由に動き回るようである。『円覚経』のような祖師方が受け継いできた仏法は、効能が切れた葉のようなものであるから、それに頼ることは無駄なことである。慌てず騒がず日常底に徹すればよいのである。また、この則において故紙とは『円覚経』を指している。

〔釈意〕

自分自身の存在を明らかにし尽したかどうかがこの公案の主題となっている。諸仏が口を壁に掛けるとは黙ってしまうという意味である。それでも一人だけ笑っている者があると徳山は言う。仏教の真髄を極め尽くしまえば、言葉による説明は不要なことに気づくのである。しかし、沈黙を守り一人でその境地に留まるのではなく、大笑する者に重ねることができようであろう。

【頌】 頌曰。收。把斷襟喉。風磨雲拭。水冷天秋。錦鱗莫謂無滋味。釣盡滄浪月一鉤。

【訓詁】 頌に曰く。収。襟喉を把断す。風磨き雲を拭う。水冷えて天秋なり。錦鱗滋味無しと謂うこと莫れ。滄浪釣り尽くす月一鉤。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。ここがすべてを収めた肝心なところ。襟元を掴まれています。風が雲を払い、水が冷えきって秋の気配がします。釣り上げた美しい魚に旨味が無いと言わないでください。海に映る月影はどんな魚でも釣り上げてしまおう針のようです。

【語彙】 【収】 全てを収めること。【徳山円明大師】 徳山縁密（生没年不詳）。雲門文偃の法嗣。【襟喉】 襟と喉元のこと。【錦鱗】 色彩の鮮やかな魚。【滄浪】 青い波。海。

第四十七則 趙州栢樹

【本則】 擧。僧問趙州。如何是祖師西來意。州云。庭前栢樹子。

【訓詁】 挙す。僧 趙州に問う。如何なるか是れ祖師西來意。州云く。庭前の栢樹子。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。僧が趙州從諗に質問をしました。達磨が西方から来た意味は何でしょうか。趙州は「庭前栢樹子」と答え、言葉に捉われることなく、目の前にある真実を捉えなさいと諭しました。

【釈意】

襟元をつかんで悟りを体得したことを示している。迷いという雲が消え、煩惱の炎の熱が冷めていく様子が秋の景色に重ねられている。錦の魚は修行僧を示している。悟りの理想を追い求め分別に凝り固まっているならば、みてくれは良くても中身が伴っていないのである。水面に映る三日月は、煩惱にまみれた人間と悟りに近いところにある人間を区別することなく等しく導いていく徳山を指している。

【釈意】

趙州の口唇皮禪は、発せられたことばが輝くように、そこに真理を含んでいる。質問に対して全く関わりが無いと思われる栢樹子の語を返し、分別を離れる事こそが、悟道への道であると示した。栢樹子の語はふんべつをはなれて、眼前の事実を表したのであるから、他の存在への置き換えは自由自在である。その点を踏まえ、思慮分別を離れて真理を体得できたならば、二つの世界に違いがないことがはつきりと解かることができる。仏法は観念ではなく、眼前の

— 眞実を正しく把握することを、栢樹子の語で如実に示した。

【頌】 頌曰。岸眉横雪。河目含秋。海口鼓浪。航舌駕流。撥亂之手。太平之籌。老趙州老趙州。攪攪叢林卒未休。徒費工夫也造車合轍。本無伎倆也塞壑填溝。

【訓読】 頌に曰く。岸眉 雪を横たえ。河目 秋を含む。海口 浪を鼓し。航舌、流れに駕す。撥亂の手。太平の籌。老趙州老趙州。叢林 攪攪として卒に未だ休せず。徒に工夫を費すも 車を造つて轍に合す。本伎倆を無くも 壑に塞り溝を填つ。

【和訳】

天童寛和尚が頌にいました。老人の白い眉のように、岸に雪が積もっていますが、川には、秋の澄みきった景色が、ありのまま残っています。海に打ち寄せる波は、(煩惱を) 飲み込むかのように、岸に打ち消えます。荒波であっても、凧いだ海に浮かぶ船のように、自由自在に操っています。戦乱の世を治めることも、太平の世を治めることも、造作のないことです。趙州よ、趙州よ(なんて優れた人だ)。修行道場の中で大騒ぎをして、いまだ論争が収束していません。無駄に工夫をしている修行僧でも、趙州にかかれば修行が進むのです。欠点を補い、目的地向かって速やかに進むのです(そこに仏法が現れます)。

【釈意】

趙州が「庭前の栢樹子」と表現したように、見る者によって外世界は同一ではない。心意識の働きは人それぞれにおいて異なるのである。趙州は、そのような相対から離れ、海に浮かんだ船を、自由に動かせるような働きを持っている。また、これは、趙州が弟子に対して、卓越した指導力を備えていることも表している。

【語彙】 【趙州】 趙州從諗(787〜897)のこと。山東省曹州郝郷の人。俗姓は郝氏。南泉普願の法嗣。曹州の廬通院で出家。趙州(河北省) 観音院に住し、四十年の間、独自の禅風を宣揚した。【庭前栢樹子】 庭先の栢樹子にも眞如が顕現すること。【無門関】 三十七則にも【撥亂之手】 乱世に生まれては、その騒亂を撥つて、天下の秩序を正して、これを平定するの意。【攪攪】 かきみだす。【造車合轍】 少しでも違うことのない妙術をいう。【塞壑填溝】 仏法が天地に充滿する。

第四十八則 摩經不二

【本則】 擧。維摩詰問文殊師利。何等是菩薩入不二法門。文殊師利曰。如我意者。於一切法。無言無說。無示無識。離諸問答。是爲入不二法門。於是文殊師利問維摩詰言。我等各自說已。仁者當說。何等是菩薩入不二法門。維摩默然。

【訓読】 擧す。維摩詰 文殊師利に問う。何等か是れ菩薩入不二の法門。文殊師利曰く。我が意の如きは、一切法に於いて無言無說。無示無識にして、諸の問答を離る。是れ入不二の法門と爲す。是れに於いて文殊師利 維摩詰に問うて言く。我等各自に説き已る。仁者当に説くべし。何等か是れ菩薩入不二法門。維摩默然たり。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。維摩詰が文殊菩薩に質問をしました。「菩薩入不二の法門とは何ですか」。文殊菩薩は「衲の考えでは、全ての真理は、言説を離れていて表せないものです。言葉で示すことも、識することも出来ないのが、菩薩入不二の法門なのです」。これについて、文殊菩薩は、維摩詰に質問をしました。「衲たちは意見を各自述べました。今度は、あなたの意見を述べて下さい。菩薩入不二の法門とは何ですか」。維摩詰は、黙っていました。

【釈意】

維摩詰と文殊菩薩との二師の問答で、文殊菩薩は、仏の境地を「菩薩入不二法門」といい、言葉や分別は不要であると述べている。在家であっても維摩詰は、そのことを十分に理解していたので、文殊菩薩の質問に対して沈黙で応じた。仏法を知解するのではなく、体解することこそが重要である。「衲たち」と文殊菩薩がいつているのは、三十二菩薩が一緒に見舞いに訪れ、それぞれに見解を述べ終えたことを意味している。

【頌】 頌曰。曼殊問疾。老毘耶。不二門開。看作家。玳表粹中誰賞鑒。忘前失後莫咨嗟。區區抱璞兮。楚庭剗士。璨璨報珠兮。隋城斷蛇。休點破。絕疵瑕。俗氣渾無。却較些。

【訓読】 頌に曰く。曼殊疾を問う。老毘耶。不二門を開き。作家を看ん。玳表粹中誰か賞鑑せん。忘前失後咨嗟すること莫れ。區區として璞を投ず。楚庭の斲士。璨璨として珠を報ず。隋城の断蛇。点破するを休めよ。疵瑕絶す。俗氣渾べて無く。却って些を較れり。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいいました。文殊菩薩が維摩詰を見舞いました。菩薩入不二の法門について、二人が問答を交わしました。中は粹玉でも表面はまだ磨かれていない原石のままです。いったい誰が、本質を見抜けるのでしょうか。自分が分らなくなってもため息をつくのはやめなさい。それは、自分を卑下して、あたかも磨かれていない玉を壊すようなことなので、本質を得ることができません。はっきりと真実を得られたならば、月が夜を照らすような輝きがあります。その時、ことさらに本質を見抜くようなことをしなくても、もともと玉に瑕はないのです。世間を捨てた文殊菩薩より、在家の維摩詰の方が、釈尊の教えに徹底しているといえます。

〔釈意〕

「菩薩入不二法門」の質問に対して、頌では、玉の善し悪しのこと置き換えている。玉を磨けば（修行）、輝きを放つ。輝きのある玉の瑕を探す（言葉を用いたやりとりの）必要はない。ここでは維摩詰が、言葉から離れたところに、仏法があることを知っていることが記されている。『維摩詰所説経』によれば、文殊菩薩は、そのことを知った上で質問をしている。文殊菩薩が、維摩詰を試していたのである。

〔語彙〕【維摩詰】毘摩羅詰利帝のこと。中インド毘耶離城の長者。在家にて、大乘菩薩の行業をした。【文殊師利】文殊菩薩のこと。【曼殊】文殊菩薩のこと。【老毘耶】毘舍離の略。維摩は毘舍離城中に生まれ、そこに住んでいたことから。【作家】老練な師家。【臍士】刎刑（断足の刑）に処せられた人。断足と宝玉については『韓非子』和氏篇十三の引用（和氏の璧）の語源。【隋城断蛇】隋侯行いて大蛇の傷を見、遂に神薬を伝けて去る。後に珠を啣んで以って報ず。其の珠径り寸にして純白なり。夜光明あり月の照らすが如し（『太平広記』四〇二）。【点破】さし示すこと。【維摩詰所説経】同経に次の記述がある。文殊師利曰。如我意者。於一切法無言無説。無示無識離諸問答是爲入不二法門。於是文殊師利。問維摩詰。我等各自説已。仁者當説。何等是菩薩入不二法門。時維摩詰默然無言。文殊師利歎曰。善哉善哉。乃至無有文字語言。是真入不二法門。説是入不二法門品時。於此衆中五千菩薩。皆入不二法門得無生法忍。（『大正藏』一四、五五一 c）

第四十九則 洞山供真

【本則】 擧。洞山供養雲巖真次。遂擧前邈真話。有僧問。雲巖道只這是意旨如何。山云。我當時泊錯會先師意。僧云未審。雲巖還知有也無。山云。若不知有。爭解恁麼道。若知有爭肯恁麼道。

〔訓読〕 擧す。洞山 雲巖の真を供養する次いで。遂に前の真を邈する話を擧す。僧有りて問う。雲巖祇だ這れ是と道う意旨如何。山云く。我當時

幾ど錯って先師の意を会す。僧云く未審し、雲巖還た有るを知る也無しや。山云く。若し有ることを知らずんば。争か恁麼に道うことを解せん。若し知ること有らば争か恁麼に道うことを肯ぜん。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。洞山良价が雲巖曇晟の真像を供養することになり、遷化される前の、真像が描かれた時の話をされました。ある僧が質問をしました。「雲巖が、ここに仏性があると答えたのはどのような意味なのでしょう」。洞山は「柄はその頃、錯つた理解をしていましたので、雲巖の宗旨を得ていません」と答えました。そこで僧は「雲巖は、仏性の存在を知っていたのでしょうか」と再び問いました。洞山は「もし（仏性があることを）知らなければ、どうしてこのように言うことができるでしょう。もし（仏性があることを）知っていたなら、どうして、このように言うことを認めるでしょう」と答えました。

〔頌〕 頌曰。争解恁麼道。五更雞唱家林曉。争肯恁麼道。千年鶴與雲松老。寶鑑澄明驗正偏。玉機轉側看兼到。門風大振兮規步綿綿。父子變通兮聲浩浩。

〔訓読〕 頌に曰く。争か恁麼に道うことを解せん。五更の鶏家林の曉に唱う。争か恁麼に道うことを肯ぜん。千年の鶴雲松と与に老う。宝鑑澄明にして正偏を驗す。玉機轉側して兼到を看よ。門風大いに振つて規步綿綿たり。父子變通して声浩浩たり。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。どうしたら、このように言うことを理解できるのでしょうか。五更の時を鶏が知らせ、日が昇ると、家や林が暁色になるように、隠れていたものが現れてきま

〔釈意〕

洞山良价が師である雲巖曇晟の悟りについて僧に示した。仏性、悟りについて問われても、文字や言葉で伝わるものではないので、それを説明することはできない。あれこれ詮索して事実を知ることではなく、そこを抜け出して真の自己を確立しなくてはならない。雲巖が達悟の人でなかったら、「ただこれ」と示すことはできなかった。しかし、悟道という分別がもしあったなら「ただこれ」ということはできなかった、と洞山はいつている。

〔釈意〕

明と暗の二極が相対しているとき、真実は隠れてみえない。それは、煩惱があり、眼前に現れているものも見えていない分別地にあるからである。これは、仏法に置き換えても同じことで、文字の理解だけでは不十分である。師の教え

す。どうして、あえてこのようなことを言うのでしょうか。千年生きた鶴が、雲にかかった松の枝の上で時を過ごしているように、表に現れているものが隠れてしまっています。貴重な鏡は、煩惱の入る余地がないほど明るく、現れているもの、隠れているものも正しく映しています。玉が動くように、時の流れによって転変し、移りかわる世界が現実世界なのです。洞山の家風は、弟子達によって脈々と続いています。師資の仏法は、自在に適應して天下に名声がとどろいています。

を受け止めて、体現しなくては、真に仏法が相伝したとはいえない。それを「仏向上」といい「進一歩」というのである。

【語彙】**【洞山】** 洞山良价（807～869）のこと。雲巖曇晟の法嗣。越州（浙江省 諸暨県の人。俗性は俞氏。五洩山靈黙に従って出家。大中年間（847～860）に豫章（江西省）の高安の新豊洞に入り、洞山広福寺を建立。【雲巖】雲巖曇晟（780～841）のこと。萊山惟儼の法嗣。鐘陵建昌の人。俗性は王氏。二十年、百丈懷海に参じた後、萊山惟儼の法を嗣いだ。【逸真話】真相を写す（肖像を描く）こと。【宝鑑】貴重な鏡のこと。靈智のたとえ。【規歩綿綿】『顔氏家訓』序致篇の引用。一挙一動が規矩にならなっていること。綿綿は、長く続いて断えざるさま。【声光浩浩】名声や徳光が広まるさま。

第五十則 雪峰甚麼

【本則】**【本則】** 舉。雪峰住庵時。有兩僧來禮拜。峰見來以手托庵門放身出云。是甚麼。僧亦云。是甚麼。峰低頭歸庵。僧後到巖頭。頭問。甚麼處來。僧云。嶺南。頭云。曾到雪峰麼。僧云。曾到。頭云。有何言句。僧舉前話。頭云。他道甚麼。僧云。他無語低頭歸庵。頭云。噫當時不向他道末後句。若向伊道天下人奈雪老何。僧至夏末再舉前話請益。頭云。何不早問。僧云。未敢容易。頭云。雪峰雖與我同條生。不與我同條死。要知末後句。只這是。

【訓読】 挙す。雪峰住庵の時。兩僧あり 來つて禮拜す。峰 來るを見て 手を以て庵門を托して 放身して出でて云く。是れ甚麼ぞ。僧亦云く。是れなんぞ。峰 低頭して庵に歸る。僧 後に巖頭に到る。頭問う。いづれの処より來るや。僧云く。嶺南。頭云く。曾て雪峰に到るや。僧云く。曾て到る。頭云く。何の言句かありし。僧 前話を挙す。頭云く。他はなんと道いしや。僧云く。他語無くして低頭して庵に歸る。僧云く。噫 當時 他に向かつて末後の句を道わざりき。若し伊に向かつて道わば天下の人 雪老を奈何ともせず。僧 夏末に至つて再び前話を挙して請益す。頭云く。何ぞ早く問わざる。僧云く。未だ敢えて容易にせず。頭云く。雪峰は我と同条に生ずと雖も。我と同条に死せず。

末後の句を知らんと要せば。只だこれは是れ。

〔和訳〕

諸君よく聴きなさい。雪峰が庵に住していた時、二人の僧が来て礼拝しました。雪峰は二人の僧が来るのを見て、手で庵の門を押し開き、体を転じて言いました。「これはなんですか」。僧も言いました。「これはなんですか」と。それを聞いて雪峰は頭を下げて庵に帰ってしまいました。「どこから来たのですか」。僧は言いました。「嶺南です」。巖頭は再び問いました。「雪峰の所へ行ったことはありますか」。僧は言いました。「あります」。巖頭は問いました。「雪峰はどんな説法をしていますか」。僧は雪峰を尋ねた時のことを話しました。巖頭は言いました。「雪峰は何か言いましたか」。僧は言いました。「なにも言わず、頭を下げて庵に帰って行ってしまいました」。巖頭は言いました。「ああ残念だ。あの時、雪峰に決着の一句を伝えなかつたことが。もし雪峰が会得していれば、天下の人々は雪峰をどうすることもできなかつただろう」と。僧は夏安居の終わりに、再び前の話を取り上げて巖頭に教えを請いました。巖頭は言いました。「どうしてもっと早く問わないのだ」。僧は言いました。「簡単なことではありません」。巖頭は言いました。「雪峰と柄は同じ生まれですが、一緒に死ぬことはないのです。ぎりぎり決着の一句をしりたいならば、ただ、これがそうだといいことです」。

〔釈意〕

雪峰義存と巖頭全豁は、同じ徳山宣鑑の代表的な門下であり兄弟子である。巖頭のことは第二十二則「巖頭拝喝」に出ており、師匠の徳山と力を合わせて、法弟の雪峰を指導し大悟に導いた話である。雪峰は兄弟子の巖頭に育てられ、徳山の同門となり、この兄弟弟子の物語が本則である。会昌の沙汰といわれる仏教弾圧の時代に、雪峰は庵に両僧が来るのを見て渾身で法を示したのである。両僧の対応を見て、仏の教えのすべては眼前に現れており、この世界が仏世界であり真実であるのに、この両僧は問答の形だけ知っている偽物と見破り、負けたふりをして帰ってしまった。この僧は、巖頭に参学した折り、雪峰が何を教えたかと問われて経緯を話した。雪峰は無語で帰つたことを聞いて、究極の一句を教えてなかつたと言っているが、これはこの僧にことさらに聞かせたことばである。巖頭にしてみれば、雪峰の教えに迷う僧を導こうと試みて、自身での究明に向かわせている。雪峰の「これなんぞ」と巖頭の「ただこれこれ」は同意である。同じ師匠のもとで悟しても、悟後の宗風が違うのだと親切に導いている。師の道をただなぞるのは、真の悟道といえない。

【頌】 頌曰。切磋琢磨。變態殺訛。葛陂化龍之杖。陶家居蟄之梭。同條生兮有數。同條死兮無多。末後句只這是。風舟載月浮秋水。

【訓誥】 頌に曰く。切磋し琢磨し。変態し殺訛す。葛陂化龍の杖。陶家居蟄の梭。同条に生ずるは数あり。同条に死するは多無し。末後の一句只這是。風舟 月を載せて秋水に浮ぶ。

【和訳】

雪峰と巖頭は自らの修行をみがき、変わった行動やなまり言葉を用います。龍となった杖のようであり、壁に掛けられて龍となるのを待っている梭のような存在です。同じところにうまれることは多くあっても、同じところで死ぬことは少ないのです。最後の一言は、「他ならぬこれがそうだ」につきまます。風にまかせて、舟が月を載せて秋の水辺に浮かんでいます。

【釈意】

巖頭と雪峰の兄弟は、師・徳山の下で切磋琢磨して得悟している。雪峰は門を突然開いて、「これなんぞ」と言つて撰化を行じた。巖頭は末期の一句云々といい、更に分別を捨てるべきことを示した。宏智は、表現は異なっても伝えたことは同じであり、同じ徳山門下で仏法を会得したとしても、修行僧を導く接化の様態は同じでないという。

【語彙】

【雪峰】 雪峰義存（822～908）、徳山宣鑑の法嗣。真覚禪師。【巖頭】 巖頭全夔（828～887）、徳山宣鑑の法嗣。諡は清厳大師。雪峰の兄弟子。【夏末】 四月十五日より七月十五日に至る。三ヶ月九十日を一夏という。此の間、禁足して安居弁道することを結制安居という。夏末はその一夏の終わりの前の時をいう。【請益】 もとは『礼記』の語で、学人が古則公案について師家に審問して垂誠を受けることをいう。【切磋琢磨】 とく他の指導を受け、自らも進んで徳を進めることをいう。【殺訛】 言葉が入り込んで理解し難いこと。ここではなまり言葉。【葛陂化龍の杖】 故事に、昔、費長房という人が壺公という仙人に遇うて、山に入つて修行したが、成功しなかつた。それで暇を乞うて帰るときに、この杖を葛陂という池に投げ入れよといった。費長房が杖を葛陂に投げ込んだら、それが忽ち竜になって昇天したという。【陶家居蟄の梭】 故事に、陶侃という少年が雷沢で魚とりをしていたら、古い梭が網にかかつてきた。その梭を持ち帰つて、壁にかけておいた。しばらくして雷雨があつた。すると、その梭が竜になって昇天したという。